

第六話 六年後(前編)

八月中旬……

世間では、お盆と呼ばれる、学生のみならず社会人もそこそこ取れる、短い夏休みの真っ最中。

「だから今はそういう話じゃないでしょ恵の結婚の話でしょ？」

「それはあかさらまに明らかな論点のすり替えだよお姉ちゃん」

とある都内の一戸建て家屋のリビングに、煽(あお)るような口調とうんざりした口調の、けれど微妙に似た音色の二つの声がぶつかり合っていた。

「すり替えてるのは恵の方じゃない。あんた彼ともう何年になるの？ 父さんも母さんもずっとやきもきしてるのよ？」

「毎日顔合わせてるけど二人ともまるっきりそんな気配ないから。お姉ちゃんこそたまにしか帰ってこないくせに知ったかぶりしないでよ」

一人は、もう説明不要の加藤恵。

そしてもう一つの声の主は、恵の『お姉ちゃん』という呼称からもわかるように……

いやアニメしか見てない人どころか原作読者ですらナンバリングしか追っていない人にはわからない、超レアキャラ（FD2の表紙を飾った人）でごめんなさい。

現在の名を吉永宏美。そして旧姓を加藤という、恵の六歳年上の実姉だったりします……

「察してあげなさいよ。一日でも早く娘のウェディングドレス姿を見たいのに、気を遣って言い出せない親心ってやつを」

「それはもうお姉ちゃんの時に十分堪能(たんのう)したから。次女にそんな過度な期待なんてないから」

とある都内の一戸建て家屋……具体的にいうと加藤家のリビングには、お盆の墓参りで帰省した姉が、妹を結婚ネタで煽るという、昭和のホームドラマかよと突っ込みたくなるような光景が繰り広げられていた。

なお、最初にその所帯じみた空気を持ち込んだのは……

「そういえば恵ちゃんの彼氏って、今でも安芸君なの？ だとしたら俺、確か一度会ってるよね？」

「そう！ その安芸君！ 詳しく聞かせてよ圭ちゃん。あたし何度頼んでも一度も会わせてもらってないのよね～」

「……圭くんはさっきから余計なネタ振りとかしてないでちょっと黙っててくれないかなあ」

「お～お～恵お姉ちゃん怖いでちゅね～、初美(はつみ)ちゃ～ん」

乳児を膝に抱いて相好を崩しまくりな、姉妹の真ん中くらいな年恰好をした青年だった。

その名を加藤圭一。

一応、原作(二巻)でもアニメ(第一期四話)でもほんのちょっただけ登場した、加藤姉妹の従兄弟(CV. 斉藤壮馬)である。

「だいたい、圭くんが初美ちゃんの自慢話ばかりするからこんなめんどくさい話になったんだよ？」

「そうそう、孫のいないウチの親に余計なモノ見せないでよ～」

「自慢しない訳ないでしょ！こんな天使他にいる？もう全世界にこの可愛さを広めていくべきだと思うんだよね俺は」

「あ～、バカ親だ～」

「せめて親馬鹿って言ってあげようよお姉ちゃん」

「そういうの痛くも痒(かゆ)くもないんだよね～。二人とも子供持てばわかるよ？」

「うわぁ、また話が戻ってきた」

「お姉ちゃんが余計な振りするから」

「振ったの恵でしょうがら～！」

初登場時はイケメン医大生だった彼も、こうして結婚し娘をもうけた今となっては、すっかりバカ親……いや良きパパへと変貌を遂げていた。

そして、その駄々洩(だだも)れな娘への愛情と自慢にあてられた姉妹の両親が、『宏美もそろそろ……』と言い出し、更にその長女への矛先を『いやいや恵がさっさと結婚して作る方が早いでしょ』と次女へとぶよ飛ばし……

こうして、傍目には仲良いのか悪いのかよくわからない親戚三人の、喧嘩ともじゃれ合いとも取れる大騒ぎに発展していた訳で。

「そうか、あの安芸君かぁ……だとしたら随分と長い付き合いだよな。俺が会ったのって、恵ちゃんが高二の時だから、もう七年になるよね？」

「……なんかもう『すぐに子供の頃の恥ずかしい話を持ち出す鬱陶しい親戚のおじさん』になりかけてないかなあ圭一くん」

「そうなのよ、このコ見た目は淡白に見えるけど、一皮むくとほんっと一途……って言えば聞こえはいいけど、執念深いつていうか、重いつていうか」

「……………それと妹を煽るしか楽しみがない小姑は一生黙ってて欲しいんだけど」

……なお姉妹の両親と姉の旦那と圭一氏の奥さんは、このめんどくさい姉妹喧嘩を避けるため、皆、夕食の支度と称してキッチンに逃げ込んでしまっていたりした

「ほんと、これだから親戚の集まりって嫌。やっぱり仕事行ったらよかった」

「けど今週、会社お休みなんでしょ？社長さん(安芸君)もお墓参りで長野って言ってたじゃない」

「あ～もうっ、早く帰ってこないかな倫也くん」

※

※

※

「で、倫(とも)君どうなの？そろそろ結婚は」

「だからここはそういう場じゃないでしょ先祖に思いを馳せる場でしょおじさん!？」

とある地方(長野県)の一軒家の広々としたリビング……というか畳敷きの大広間に、煽るような口調と引きつった口調の、全然似てない二つの声がぶつかり合っていた。

「なに言ってんだい、もうお経は終わったんだからこれからは過去より未来の話だよ！」

「そうそう、それにご先祖様だって、大事な子孫の結婚話だったら興味

津々に決まってるじゃないの」

「倫也君モテそうだもんなあ、彼女の一人や二人いるんだろ？」

「ほんと、久しぶりに会ったら男前になって！」

「やっぱお盆だからって帰省なんかするんじゃないかった……」

いや、それからも年季の入った煽り口調の方はどんどん増え、ただ一人、守勢に回された青年の身の置き場をどんどんなくしていく。

もちろんその育年は、もう説明不要の安芸倫也

そしてその他の年配の方々は、お盆の墓参りのために、本家であるここ長野県某所に集った、いわゆる“氷堂家の一族”。

「でも倫君、会社の方好調なんだろ？そしたら今度は当然“身を固めなくちゃ” ってるんだろ？」

「そういえば社長さんなんだってねえ～」

「まだ若いのに！」

「ほんと、子供の頃からお勉強できたもんねえ」

「い、いやあ、小さな会社ですから……」

で、その中でも常に話題の口火を切り続け、一番倫也を煽っていたのが、氷堂泰隆氏。

現在は実家を出て東京近郊に暮らしている、氷堂家の次男。

倫也の母親の兄にして、倫也にとっては伯父にあたる人物。

そして……

「トモの奴、もう六年も付き合ってる彼女がいるから。いい加減待たせすぎなんだよね～」

「美智留っ!？」

ここで満を持して煽り……会話に参戦した、氷堂美智留の父親でもある。

「ほんと、仕事場で朝から晩までイチャイチャされる身にもなって欲しいよねえ。鬱陶しいったら」

「この裏切り者っ!？」

口に頬張(ほおば)っているいなり寿司がまだ少し発音を邪魔しているが、美智留の一言一言は、的確に倫也の弱点を、やっかみという力を込めて突き刺してくる。

「あ～、そういえばみっちゃんはトモちゃん会社に勤めてるんだっけ」

「じゃあ、倫也君の彼女とも知り合いなんだ？」

「どんなコどんなコ!? ちょっと今度連れてきなさいよ～」

「い、いや、それは……って、そんなことよりも美智留の話にしようよ! こいつ去年、メジャーレーベルから……」

「あいにくあたしは音楽が恋人だから。皆様のご期待に添えられなくてごめんね～」

「え～、そうなの? みっちゃんもすっごく美人さんになったのにねえ」

「東京で働いてると出会いとかたくさんあるだろ? もったいない」

「知り合いにいい人いるんだけどどう? こっちで郵便局に勤めててねえ……」

「いや、テレビ CM もやってるんだけどこいつ……そっちには食いつかないの……? 」

そして倫也の必死な世論誘導も、『田舎の親戚の興味は下世話な方向にしか向かない法則(偏見)』により、不発に終わってしまい。

「いや～、あたし今はオトコには興味ないから。で、トモの彼女なんだけどさあ……」

という訳でこの生贄勝負、美智留の勝利に終わると思われたその瞬間……

「ほんと、倫君はこうして立派になったってのに、ウチのはずっとこんなだから……」

「……あぁっ!？」

「み、美智留……？」

さっきまで倫也を煽っていた急先鋒が、その矛先を急に自分の娘に向けたことにより、場の空気が一変する。

「高校の時からずっとそうだ。倫君は私立のいいところ行ったのに、お前は最後まで行くところ決まらずに……」

「今さらそんな話持ち出すとかいい加減しろよ父さん！みんなの前だぞ！」

「ちょ、ちょっと、二人とも落ち着いて……」

「高校出てもずっとフラフラして……いつまで経っても歌手になるだの変な夢ばかり追いかけて」

「成功してんじゃん！あんたが娘のこと全然見てないだけじゃん！」

「い、いや、夢ばかり追ってるのは俺も同じなんですけど……」

「だいたい、美智留がこんなになったのは半分は倫君のせいだぞ！倫君が美智留のこと貰ってくれないから！」

「って、いきなりとばっちり来た!？」

「毎年ここで、いつも二人仲良くしてたじゃないか……どこにも嫁に行けなくても倫君がいると思ってたのに、いつの間にか嫁さん見つけちゃって……っ」

なお、目聡い人は気づいていたけれど、泰隆氏の目の前には、いつの間にか空になったお銚子（ちょうし）が大量に転がっていて……

「まだ結婚してないよ独身だよ！ていうかイトコだつてば俺たち！」

「イトコがなんってんたい！倫君のお父さんとはとっくにその方向で話がついてたってのい！」

「ちょっと父さん母さん！本当なのそれ!？」

なお倫也の両親は、広間の奥でビールを呷（あお）りながら、完全に他人の顔を決め込んでいた……

※

※

※

「あ～、今日はお盆ってより厄日だったわね～」

「圭一くん、厄介なおじさんになっちゃったね～」

深夜の、加藤家の、恵の部屋。

ベッドに横になり床を見下ろす妹と、床に敷いた布団に横たわりベッドを見上げる姉。

今や毎年の恒例となった、姉の旦那を妻の部屋に一人残してまでの、姉妹水入らず。

「ホント、自分の子供が可愛いのはいいんだけどさあ、とぼっちり食う身としてはこまったもんじゃないよね～」

夕食後、従兄弟（圭一）一家はおねむの娘を大事そうに抱えて、この家を後にした。

そして残された姉妹は、その可愛い天使との別れを惜しんだのも束の間、両親によって鳴らされた、家族会議第二ラウンドのゴングを聴くことになったりして……

「で、お姉ちゃんどうするの子供？」

「今は子供だけが夫婦の形じゃないでしょ～」

そして、その会議をフルラウンドの激闘の末、なんとか引き分けに持ち込んだ姉は、その時こ何度も唱えたガードの呪文を、今も飽きることなく唱える。

なお、その際セコンドにいた彼女の夫は、それはもう爽やかな笑顔で完全ノーコメントを貫いていた。

「じゃあ、欲しくないんだ？」

「欲しい」

「……お姉ちゃん」

それはきっと、彼はいつも、彼女のその、微妙で、プレブレで、けれど愛すべき妻の思いを聞かされているに違いないからで。

「ただ、もうちょっとさあ……もうちょっとだけ、今のままだいいんだよね～」

「でもお姉ちゃんもう三〇超えたし、作るんだったら早いところ……」

「ちょっと黙ってろよ妹」

で、多分、いつもこんな感じで黙らされているに違いないからで。

「で、姉のことはともかく、妹の方はどうすんのよ？ 子供」

「いやわたしはそれ以前の問題だから」

「そう！その“それ以前のこと”についてよ！」

「……………」

で、妹の方も、旦那同様、この姉にして妻の、あからさまな世論誘導に抗う術はなく。

「結婚、すんの？」

「今は結婚だけが男女の形じゃないでしょ……」

「じゃあ、したくないの？」

「……………」

そして姉ほど、適当な言い訳を強弁して乗り切る剛腕もなく。

「今さらなんでそこで黙り込むのよ？ あんた六年も続いてるんでしょ？」

「半分は、仕事の関係だし」

「今でも彼の家に毎日入り浸ってんでしょ？」

「仕事場だからだし。他のメンバーも入り浸ってるし」

「じゃあ、彼のこと嫌になった？それとも飽きた？」

「……………」

「あんた本当、二択に弱いよね～」

「そんなこと、ないもん」

「あるもん過ぎるでしょ。正直者のくせに意地っ張りだから、嘘はつけない」

いし、正解を絶対に言おうとしないし」

「……わかってるんなら、そのくらいにしといて欲しいんだけどなあ」

「そうはいかないんだよね～、あたしは正論者のくせに意地悪だから」

「もう……」

けれど妹は、この、子供の頃から受け続けてきた姉の理不尽を、『めんどくさいなあ』と思うことはあれど、心の底から忌避することは、今でもなくて。

「結婚なんて、そんな難しいことじゃないつて。プロポーズして式挙げて披露宴やったら、後は成田離婚だけじゃない」

「それだどこっちからプロポーズすることにならない？ それまちよつとなあ」

「そっちに突っ込むんだ……」

それはきっと、この姉の弄りが、あまりに妹に対する愛情に溢れているからで。

「お姉ちゃんと同じだよ……もうちょつと。もう、ちょつとだけ」

「なに？もしかしたら、もっといい男と出会えるかもって？」

「それはない。というか倫也くんよりいい男なんていくらでもいる」

「じゃあ、マリッジブルー？結婚決める前から？」

「ん～、それも違う」

「なら……」

「あのさあお姉ちゃん……わたしたち、会社、やってるんだよ？それも、やっと軌道に乗ったところなんだよ？」

『株式会社 blessing software』

デビューは、昨年マルズよりリリースされたアイドルソーシャルゲーム。

そして今年になって立て続けに出した二作目は、構想三年、会社設立当初から開発していた、大型恋愛アドベンチャーゲーム。

一作目と変わらず、マルズのブランド名を冠してはいるものの、そのパッケージにはちゃんと開発会社として、『blessing software』の名とロゴが大きく載り。

そして、その作品は、マルズのブランド力と、グラフィックの美麗さと、キャラクターの魅力と、練りに練った物語の力で、徐々に、徐々に評判を呼び……

「今が……一番大事な時なんだよ？」

「それって、結婚と関係なくない？」

「あるよ……そんなことで、倫也くんは、負担、かけられないよ」

「そんなことって……じゃあ、いつならいいのよ？いつになったら……」

※

※

※

「や～、大変だったね～お互い」

「ったく、来年こそはもう来ない！お盆参りは今年限りだ！」

深夜の、氷堂本家の、大広間。

田舎ならではの夜景を、縁側に並んで座って堪能する、イトコ同士（倫也と美智留）。

「それ去年も言ってなかったつけ？ トモ」

「……きっと来年も言ってるんだろうなあ」

二人の祖母が嬉々として出してきたおろしたての浴衣は、多分、今日しか使われないはずなのに、二人にぴったりで。

その事実が、倫也の威勢を、少しだけ弱くする。

「でもさ、ありがとね、トモ」

「何が？」

「いや、な～んかさ、久しぶりに、あたしのマネージャーみたいなこと、やってくれて」

「みんなが知らないのが我慢できなかつただけだよ……お前が、実は凄い奴なんだって」

今はそれぞれ部屋にこもり、昔話に花を咲かせたり、既に酔っぱらって眠っていたりする、一〇人を超える親類一同。

あの、美智留と父親との騒動の後、倫也は、その一人一人に、美智留の新曲のPVを見せて回り、彼女が既にメジャーレーベルで活躍する人気アーティストであることを喧伝（けんでん）して回った。

それはもう、かつての高校時代の、全開オタクぶりを彷彿とさせるほどの暑苦しさで。

「ま、しょうがないって。この家じゃさ、トモはみんなのヒーローなんだ」

「よっぽど子供の頃の貯金が効いてんだろうなあ……」

近い年代のイトコたちが、たまたま女の子ばかりだったこともあり……

ただ一人の男の子で、東京っ子で、年に数回しか訪れない倫也は、それはもう、祖母を始めとする本家の人たちに可愛がられていた。

それこそ、同い年の美智留から見たら、思いっきり理不尽を感じてもおかしくない程に。

でも……

「それに、あたしにとっても、さ」

美智留も結局は、その親戚たちと同じ目で、倫也を見ていた訳だったけれど。

「でも今は、お前の方が凄いだろ？ それこそ、あの二人と同じくらいに……」

「どっかな～？ あたしはまだまだ、これからって感じだけどね～」

二人の脳裏には、正しく、同じ姿が浮かび上がる。

かつて同志で、そして今は、雲の上に駆け上がっていった、二人の女生の姿が。

「でも、メジャーに行っても、お前はまだ、俺のチームにいてくれる。俺たちとも、夢を追ってくれる……」

「ま、今年はボーナスも出たしね～」

「それでも、ありがとな、美智留」

「っ……」

それは、本当は、自分がさっき倫也に感謝した時みたいに、軽く受け流すべき言葉だったけれど。

それでも美智留は、いつもの彼女らしくなく、一瞬、言葉を詰まらせてしまう。

「で、トモ、どうすんの？」

「何が？」

それは多分、知っているから。

「そりゃ、父さんたちが聞いてたことに決まってんじゃない」

「な……」

氷堂家だけの、彼女だけのヒーローだった男の子とは、多分、そろそろお別れだと。

「加藤ちゃん……どうすんの？」

近いうちに、きっと彼は、この場所に、自分がちょっとだけ居心地の悪くなる、親友の女の子を連れてくるはずだと。

「あのコの覚悟、どう受け止めんの？」

「い、いや、えっと……」

「正直、決めるんだったら今なんじゃない？ 会社、やっと軌道に乗ったし」

「めっちゃ苦勞したけどな……」

初回本数を、マルズから聞かされた時の絶望とか。

発売日が被った、他社の大作の盛り上がりぶりへの歯痒さとか。

少なかった初回本数に、二週間後にリピートがかかったときの安堵（あんど）とか。

二度目のリピート本数が、初回の倍だったときの驚きとか。

戻って来たアンケートの、熱いコメントを見た時の涙とか……

「そうだよ、加藤ちゃん、苦勞したよ……多分、トモと同じか、それ以上にね」

「うん……」

そんな、思い出したくもなかったり、忘れたくなかったりする記憶の中にいるのは……

表情は相変わらず薄めでも、その時々感情が、自分と全く同じだとわかってしまえるようになった、いつも見ている、いつでも、いつまでも見られる顔で。

「だったら、あんたはさ……」

※

※

※

「そんなことって……じゃあ、いつならいいのよ？いつになったら……」

「あと、二年は……まだ、かな」

※

※

※

「だったら、あんたはさ……」

「今年……うん、今年こそ」

（了）